

論文審査の要旨

| | | | |
|---|----------------|---------|---------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 （ 教 育 学 ） | 氏名 | 辰 己 明 子 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第①・2項該当 | | |
| 論 文 題 目 リーディング指導における翻訳指導の効果に関する実証的研究 | | | |
| 論文審査担当者 | | | |
| 主 査 | 教 授 | 深 澤 清 治 | |
| 審査委員 | 教 授 | 築 道 和 明 | |
| 審査委員 | 教 授 | 松 見 法 男 | |
| 〔論文審査の要旨〕 | | | |
| <p>本論文の目的は、小説の翻訳プロダクト評価尺度を開発し、翻訳指導（英語から日本語）により、学習者の翻訳プロダクトの変化を量的かつ質的に検証することである。本論文では、全5章を通して、以下に示す3つの研究課題を検証した。</p> <p>(1) 教室内での使用を目指した小説の翻訳プロダクト評価尺度とは、どのような観点と項目で構成されているのか（調査1）。</p> <p>(2) 翻訳指導によって、学習者の訳文を評価する小説の翻訳プロダクト評価尺度結果に、どのような変化が見られるのか（調査2）。</p> <p>(3) 翻訳指導によって、学習者の訳文には、どのような質的变化が見られるのか（調査3）。</p> <p>リーディング指導における翻訳を用いた指導の提案を目指し、理論的枠組みのもと、翻訳指導を実施し、その効果を明らかにするものである。</p> <p>第1章では、研究の目的と背景、用語の定義、論文構成を述べた。研究の背景として、これまでの翻訳研究において、①英文和訳と翻訳を定義上区別して検証すること、②翻訳指導の効果を実証的に検証すること、③評価基準を伴った翻訳プロダクト評価尺度を開発すること、についての研究が少ないことを指摘した。</p> <p>第2章では、翻訳と英文和訳に関する先行研究を概観した。まず、英文和訳の問題について精査し、文章理解モデルを援用した日本人英語学習者の翻訳プロセスモデルを示し、翻訳と英文和訳が産出されるまでの過程を示した。続いて、翻訳プロダクト評価尺度研究の概観では、評価者による主観的な評価基準の問題を取り上げ、日本人英語学習者を対象とした翻訳プロダクト評価尺度、評価項目セットを概観した。この評価項目セットの限界点として、①項目に対する評価基準の設定がなされていないこと、②小説の特徴に関する項目が含まれていないこと、③専門家による妥当性の検証が行われていないこと、の3点を指摘した。</p> <p>第3章では、研究課題(1)に答える調査1を実施した。調査1では、先行研究をもとに、本調査で作成した小説の翻訳評価項目の信頼性と妥当性を検証した。翻訳と英語教育の専門家による内容的妥当性の検証、学習者による表面的妥当性の検証、筆者を含む3名の英語教員による信頼性の検証を実施した。その結果、小説の翻訳評価項目の信頼性と妥当性は確認され、教室内での使用を目指した小説の翻訳プロダクト評価尺度には、「正確さ」、「分かりやすさ」、「小説の特徴理解」の3つの観点と、各観点に対して2つずつの項目（全6項目）で構成され</p> | | | |

ることが、明らかになった。

第4章では、翻訳指導の効果を検証すべく、研究課題(2)および(3)に答える調査2と調査3を実施した。調査2と調査3共通の翻訳指導では、文章理解モデルを援用した日本人英語学習者の翻訳プロセスモデルをもとに、学習者の訳出に焦点をあて、英文和訳から翻訳へ転換させることを目的とし、翻訳課題ワークシートを用いて、全7回の翻訳指導(各30分)を次の2つの手順で進めた。

- (1) 翻訳指導を実施する前には、宿題として課した翻訳課題ワークシートで学習者により産出された訳文を各自で修正させ、訳文の統制を行った。
- (2) 学習者に対して、(1)での訳文を、文脈の意を汲んだ訳語を選び、読み手にとりわかりやすい日本語で書かれた訳文へと転換することを求めた。

調査2では、翻訳指導の効果を検証するために、学習者に対して、事前・事後テスト(英語から日本語への翻訳課題)を実施し、学習者の訳文を、調査1で作成した小説の翻訳評価項目を用いて評価した。その結果、事後テストにおいて、小説の翻訳評価項目の全項目において、学習者の訳文に改善が見られたことが明らかになった。調査3では、上述で示した翻訳指導により、学習者の訳文にどのような質的変化が見られたのかを明らかにした。翻訳指導で使用した翻訳課題ワークシートを質的分析の対象とし、翻訳指導前・翻訳指導後において学習者により産出された訳文の変化を検証した。その結果、翻訳指導後の学習者により産出された訳文では、文脈に合う訳語を選択し、読み手(第三者)を意識した日本語で訳文が産出されていたことが、明らかになった。

第5章では、本論文の要約と総合的考察、教育的示唆、本論文の課題点を示した。本論文で用いた文章理解モデルを援用した日本人英語学習者の翻訳プロセスモデルの適切性と翻訳指導の効果が確認されたと結論づけた。

本論文の独創性は以下の3点にまとめられ、学術的および教育的意義を評価することができる。

- (1) 翻訳研究における翻訳指導の効果を実証的に検証する研究が少ない中、文章理解モデルを援用した日本人英語学習者の翻訳プロセスモデルの適切性と翻訳指導の効果を示し、リーディング指導の一つとして翻訳指導を用いることを提案したこと
- (2) 教室内での使用を目指し、教師が客観的に、そして診断的に学習者の訳文を評価することができ、また、学習者自身が理解できていない点を把握できる小説の翻訳プロダクト評価尺度を提示したこと
- (3) 翻訳指導の効果が明らかになったことから、今後の研究として英語教育と国語教育の連携に関する研究を提示したこと

EFL(English as a Foreign Language)環境にある日本人学習者にとって、日本語を活用して英語を学ぶという視点は不可欠であり、本研究では、日本人英語学習者を対象として翻訳指導を実施し、その効果について理論的な考察を行い、今後の研究に対する枠組みと日本の英語教育において重要な教育的示唆を提示した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年2月14日